

D-3スハルト体制

384. 9月30日事件



ウントゥン中佐

1965年9月30日の深夜、ウントゥン(Untung)中佐の指揮する大統領親衛隊¹が陸軍の幹部の自宅を襲ってどこかへ連行した。翌10月1日の朝7時の国営放送で革命評議会が全権力を把握したと伝えた。しかし、陸軍予備軍司令官スハルト将軍が共産党の影響下でない直属部隊の実権を把握し、間髪入れずに反撃を行った。この結果、反乱軍はその日の夕方までに鎮圧されてクーデターは失敗した。

9月30日事件といわれるクーデター未遂事件の全貌は明らかにされていないが、クーデターを仕掛けたのはインドネシア共産党とされている。この事件がきっかけとなってスカルノ大統領は政治権力を失い、また、インドネシア共産党が壊滅し、それまでのインドネシアの政治の流れを逆転させることになり、ひいては東南アジアの政治の流れにも連動した世界史的事件であった。

事件前までスカルノ大統領は政治勢力を結合した挙国体制をナサコム体制(→380)と称し、終身大統領として独裁化を進めていた。しかし、これらは本来相入れない勢力の集合であり、スカルノ大統領のカリスマ性の下にかろうじてバランスを保つにすぎなかった。この中でも〈国軍〉と〈共産党〉の対立は先鋭化していたところへ大統領の健康を巡る不安から一触即発の状態にまで緊張は高まっていた。

特に共産党側はスカルノ大統領の個人的庇護のもとに勢力を伸長させてきただけに不安感が強く、大統領生存中にクーデターによって国軍にダメージを与えて共産党の基盤の強化を計ろうとし武装蜂起したが失敗した。それが9月30日事件であるといわれる。

事件後、共産党のクーデター陰謀が暴露されるに及んで数ヶ月の間、共産党に殺害された将軍の報復を求め、反共産党デモが荒れ狂った。学生やイスラム関係者がリーダーとなっていたが、国軍がバックアップしたことはいうまでもない。

共産党員狩りの狂気は燎原^{りょうげん}の火となってインドネシア国内に燃え広がり、殺害された者の数は定かでないが、多い推定では50万人ともいわれている。{共産党⇄中国⇄華僑}という住民の反華僑感情が煽られて多くの中国系住民が巻き添えになった。

スカルノ大統領は事件当日、わけの判らないままにクーデター側の占拠する空軍ハリム基地に身を寄せた



スハルト将軍

¹ 大統領親衛隊はチャクラビラワ(Cakrabirawa)といわれるエリート集団である。大統領官邸の警護に当たった。ウントゥン中佐は実戦部隊から抜擢される前は彼に殺されたヤニ将軍の部下であった。軍歴において共産党の形跡はなく好人物として知られていた。スカルノ大統領とは面識がある程度であった。その彼がクーデターの首謀者となったのは親衛隊の華々しい職場経験が何らかの影響を及ぼしたものであろう。共産党がウントゥンを持ち上げたのはウントゥンの親衛隊の肩書きを利用したかっただけである。クーデター失敗後、ウントゥンは単独で逃れたが、故郷のテガル(中部ジャワ)でバス旅行中に捕らえられた。

ことが致命的な失敗となった。この共産党寄りのあいまいな行動のため国民の信頼を失い窮地に陥ることになった。

その後の国軍との権力抗争の中で共産党を弁護するスカルノ大統領は次第に孤立し、治安維持の権限をスハルト将軍に委ねざるをえず、権力を順次はがされて失脚した。

9月30日事件の国際的意義は東南アジアの大国が容共国家から反共国家になり、国際問題のトラブルメーカーが国内問題に専念するようになったことである。

385. クーデター未遂

9月30日事件に関しては謎が多くすべてが解明されているわけでない。第一にクーデター計画がお粗末すぎたことである。スカルノ宮廷政治の裏面では共産党と国軍幹部の対立は権謀術策を弄し、ポスト・スカルノをめぐる水面下の駆け引きから両者の武力対決は避け難いものになった。

共産党はスカルノ大統領の健康の衰えから在任中に共産党への政権移譲を実現しようと焦っていた。共産党の指導で農民を武装させ第5軍として、国軍に対抗しようという計画²をスカルノ大統領に吹き込んでいた。中国共産党が武器の提供を準備していた。

一方、国軍幹部は将軍評議会が開催されていたが、将軍評議会を共産党撲滅のための戦略を練っていると共産党は警戒してした。将軍評議会の設立目的、実際に共産党打倒計画が存在したかどうかは明らかにされていない。

10月5日の国軍記念日に軍が首都に集結する時期に国軍の実力行使があるとの噂が広まった。その前に先手必勝とばかり共産党分子が先に仕掛けたのが9月30日事件である。

共産党側に万全の準備が整えられたとは思えない。一部の共産党系軍人³の暴走に党に引きずられた節もある。クーデターの首謀者としてはお粗末な実行計画であった。

もう一つの9月30日事件の不思議はスハルト将軍の対処があまりにも機敏でありすぎたことである。事件の本当の仕掛け人は軍部であり、共産党は畏^{おそ}にはめられただけという論もある。あるいは米国CIAの謀略説もささやかれてきた。

スハルトの率いる戦略予備軍は首都ジャカルタを管轄していた師団とは別組織で、少数精鋭で最新兵器で武装されている。クーデター側は少数の戦略予備軍司令官を過小評価していたというよりは、スハルト将軍は敵対しないと錯誤したのでないか。

予備軍司令官スハルトにとり、まさに9月30日事件は千載一遇のチャンスであった。自叙伝(日経98/1月)によると10月1日朝5時に隣人の知らせで何か異変が起きたことを知ったスハルトは共産党の実力行使

² 9月30日事件当時は中国からの武器が届いていなかったため素手の共産党農民は一方的に殺戮されたが、もし中国からの武器が間に合っていたならば中部・東部ジャワは内戦になったであろう。

³ クーデターの指揮にあたったのはスバルジョ(Supardjo)将軍である。将軍は西カリマンタン州で作戦に従事していたが、9月28日に無断でジャカルタへ戻り、9月29日に大統領と会っている。何を話したかは明らかでない。スバルジョ将軍は事件当時、ハリム空軍基地でダニ(Dhani, Omar)空軍司令官とともに居た。ダニ司令官はスバルジョ将軍のために便宜を図っただけでクーデターの指揮は取っていない。スバルジョ将軍の陸軍上層部殺害の動機には上司であるヤニ将軍への個人的な恨みもあったらしい。

⁴ 9月30日事件後の軍によるPKI殺戮についてアメリカと英国は軍を支持していたことを明らかにする外交文書が機密解除されたことをマーク・カーティス(益岡賢訳)が明らかにした。

であると“直感”して予備軍司令部に駆け込んだ。

クーデター側は朝7時の国営放送で革命評議会が全権力を把握したことを告げたが、スハルトは直属部隊を動員して大統領官邸や放送局に陣取るクーデター派を追い出し、夕刻にはクーデターを鎮圧した。バンドゥンから共産党色のないシリワンギ師団の軍⁵を動員して首都を奪還し、共産党が陣取っていたハリム空軍基地も制圧した。

権力構造から陸軍を駆逐する共産党のクーデターにスカルノ大統領がどこまで関与していたかは疑問である。スカルノ大統領は直接の参画はなかったが、計画があることは知っていたらしい。当夜は連絡を待ち続け落ち着きがなかったといわれる。

9月30日事件の全貌は明らかでないが、結果的に誰が一番得をしたかという点でスハルト将軍である。スハルトは陸軍の仇敵である共産党を壊滅させたのみならず、陸軍の上層部が一掃されたことにより国軍を代表して全権力を掌中にする地ならしができた。

⇒165.ルバン・ブアヤ村、450.9月30日事件のスハルト

386. 50万人殺戮

9月30日事件を契機としてインドネシア国内は大量殺戮の嵐が吹き荒れた。10月から半年の間に殺された数は正確には分からない。少なくて10万人、多くて200万人までの諸説がある。平均的な50万人の数値が一般に流布されている。政府の公式発表⁶は87,000人である。共産党は物理的に壊滅させられた。

当時わずかに漏出してくる情報では中国系住民が被害者と伝えられた。インドネシア共産党(PKI)のバックにいた北京政府への反発とインドネシア人の生理ともいえる反華僑感情が混然となり、都市部ではPKIの疑いという口実で中国系住民は殺害された。現に多くの中国系住民が命からがらインドネシアを脱出した。

しかし殺害された50万人のほとんどは農村のPKI黨員もしくはその同調者の農民である。殺戮の最も激しかった東部ジャワのクディリ県、バニユンギ県、中部ジャワのクラテン県である。死骸はまとめて穴に掘り込まれたが、クディリではブランタス川に切断して投げ込まれたため、しばらくは川魚を食べる人はいなかった。ジャワ島以外ではバリ島殺戮がひどく、北スマトラでも殺害があった。

これらの地域の農村では9月30日事件以前にPKIは土地のない貧農を煽動して共産党の勢力を拡大し、農地解放をめぐる地主である富農と貧困農民が対立していた。中国の共産化に習い政敵を多人数で取り囲み吊り上げなどの恐喝を加えた。富農に対する誘拐や暗殺など日常的に発生しており、PKIは武装蜂起の準備をすすめていた。

9月30日事件の首都でのクーデター失敗の顛末⁷が伝えられたのはこのような時であった。それまでPKIにやられっぱなしの勢力が中央の動向を受けて攻守⁷所を替えた。

⁵ 建軍記念日のパレードのため中部ジャワ 454 大隊と東部ジャワ 530 大隊が首都に集結(各 1000 名)していた。中部・東部の陸軍には共産党の影響が浸透していたため、クーデターに参画し放送局を占拠し大統領官邸周辺を警護していた。クーデターの事情のよく分からない兵士達はスハルト将軍の率いる部隊に恐喝されて追い払われた。

⁶ インドネシアの殺戮の様子が外国に伝わるにつれ、インドネシアは国際的批判をあびるようになった。数十万という数値が報じられたため、インドネシア政府が発表した数値である。

⁷ 中央からスハルト将軍の意を受けて反共のサウオ・エディ(Sarwo Edhy)将軍が中部ジャワ、東部ジャワ、バリ島へ進軍し、農民に共産黨員の殺戮を煽動した。もし反共派の行動が遅れば、共産党の攻撃があったので、先制防衛処置であったと弁明している。

ジャワの農村には階級対立に加えて宗教対立があった。富農層は一般にサントリ(→630)といわれる熱心なイスラム教徒である。一方、貧困農民はアバンガン(→631)といわれる名目だけのイスラム教徒であり、共産党員やその同調者は宗教的憎悪も受けていた。50万人の大量の虐殺は国軍が扇動し、実際に行動したのはイスラム教徒というのが一般的である。PNI(→293)やキリスト教徒は加害者、または被害者というように地域によって事情が異なった。

同じジャワ島でも西部ジャワでは殺戮は少なかった。西部ジャワではダルル・イスラム(→332)の苦い経験があるため国軍はイスラムの暴走にブレーキをかけたからである。

大量虐殺のあった中部ジャワ、東部ジャワ、バリ島はワヤン(→904)文化の濃厚な地域であり、マハーバーラタ(→946)に親しんできた。マハーバーラタは骨肉の争いは一族縁者全てを巻き込む。同族の忌まわしい対決は神の定めたストーリーで人間は如何ともしがたい。18日間の決戦でパンダワ側が勝ち、コラワ側は殲滅される。

9月30日事件後の殺戮応酬は10,11,12の3ヶ月がピークであり、終盤はあつけないほど一方的であった。共産党について人々はコラワ側であることを自覚し、従容として死についたのだろう。まさにパラダユダ(→947)を地で行くような事件であった。

387. 3月11日大統領令

9月30日事件でもって政局が一度にひっくり返ったわけではない。スカルノ大統領は共産党を庇いつつ、なお“独立の父”の威信でもって切り抜けようとした。一方、国軍幹部は大統領に反対する世論をバックに大統領を退陣に追い込むべくこの両者の必死の権力抗争の綱引きが続いた。

それまでどのような難局をも潜り抜け立ち直ってきたスカルノ大統領のカリスマ性も今回は神通力を失った。大統領にそれまで弾圧されていた学生、知識人、イスラム関係者も反スカルノ側に与し国内は騒然とした。イスラム系学生によりカミ⁸が形成されてデモ活動に繰り出し、反共産党活動が一気に盛り上がった。

スカルノ擁護のデモも繰り出したが、反共の大音声の前に影が震んだ。スカルノの強気の発言にもかかわらず大統領の闘いは孤立無援で次第に譲歩を重ねた。

スハルト將軍は1965年10月14日に陸軍司令官⁹に任命され、11月には治安秩序回復司令部(Kopkatib)を設置し、自ら司令官となった。クーデターの素早い鎮圧で国民の人気が増してきたスハルト將軍がのし上がってきた。

ところでスハルト將軍は職業軍人であり、政治人間のスカルノ大統領にそれほど面識があったわけではない。大統領としてはこれまでの付き合いから一筋縄では御しにくいナスティオン將軍(→448)よりは、政治的に未知数であるがジャワ人であるスハルト將軍に賭ける気持ちであったろう。

しかし大勢は大統領に退潮であった。1966年2月21日スカルノ大統領は内閣改造を発表するが、共産

⁸ カミ=KAMIはインドネシア学生行動戦線(Komite Aksi Masiswa Indonesia)の略語である。主力はイスラム系の学生である。9月30日事件後の10月末、国軍の支援を受けて、反共産党、反スカルノ運動を展開した。KAPPIは反共の高校生を組織化した。カミの緑と黄色の制服は豊富な資金源を示唆し、CIAの関与が無視できない。スハルト体制の政治家には学生デモを先導したカミ出身者が輩出した。インドネシアの学生運動について一般的にいえることは格好いい制服を与えて煽動すればアモックの体質から大規模動員は容易であるtびわれる。

⁹ 陸軍、海軍、空軍、警察からなる国軍に司令官は形式上は大統領であるが、4者の勢力関係から陸軍司令官が実質上の国軍司令官であった。

党シンパとして標的にされていたスバンドリオ外相(→440)を含む顔ぶれであったため、カミは反発し、2月24日の就任式に大統領官邸を取り囲んだ。その混乱の中で大統領親衛隊の発砲によって死者¹⁰が出た。激昂したカミに対して軍は沈静化させるより、手をこまねいていた。

1966年3月11日、大統領官邸はデモ隊に取り囲まれ、危機を感じたスカルノ大統領はヘリコプターでボゴール宮殿(→113)に逃れた。慌ただしい逃走であったので同行したスバンドリオ外相は靴を履く間もなかった。



バスキ・ラフマツ



モハマッド・ユスフ

バスキ・ラフマツ(Basuki Rachmat)、モハマッド・ユスフ(Mohammed Jusuf)、アミール・マフムッド(Amir Machmud)の3人の将軍がボゴール宮殿へ押しかけ面会を強要し長談論が行われた。宮殿の密室でスカルノ大統領に政治権力の放棄を迫った。力つきた大統領は後にスプル・スマル¹¹といわれる『必要と思われる一切の処置を取る権限をスハルト将軍に委譲する』という文書に署名した。



アミール・マフムッド

翌3月12日、スハルト将軍は共産党の非合法化を告知し、内外にインドネシアの政権はスハルト将軍に代わったことを国内外に誇示した。終身大統領スカルノからスハルト将軍への政権の委譲は時間をかけながら“^{せんじょう}禅譲”の形を整えたものの実質的には軍部によるクーデターであった。3月11日をもって名実伴にスハルト体制が始まった。

388. 政権発足の合法性

スカルノ大統領が政権をスハルト将軍に委ねたスプル・スマル(→387)といわれる『3月11日大統領令』文書については当時から奇怪な噂があった。スカルノ大統領が署名したという文書を実際に確認した人がいないことである。

文書の所在は行方不明であると当局は説明してきた。そこで生じる憶測は文書は実際には存在しなかったのではないか、あるいは記載内容が異なるのではないかという疑いである。仮にスプル・スマルの内容が公表されている通りとしても治安維持に関する処置への権限であり、共産党の非合法化まで行うのは拡大解釈でないかという疑問である。

インドネシアでは言葉の頭文字をとったシンカタン(→964)による造語が頻繁に行われる。造語は新聞などが勝手に造るのではなく当局側にコントロールされている。それにしてもこのスプル・スマルは意味深長であ

¹⁰ 1966年2月の大統領官邸包囲デモでUIの医学生アリフ・ラフマン・ハキム(Arif Rachman Hakim)が死亡したため、死者は殉教者のごとく扱われ、カミのデモは激しさをました。スカルノ大統領がカミを禁止したことでさらにエスカレートした。1998年5月のトリサクティ大学事件後の成り行きの構図は32年前の事件と驚くほど似ている。

¹¹ スプル・スマル(SUPRE SEMAR)は surat perintah seblas maret の略語であるが、スマルにはワヤンの人物像である。スハルト将軍の権力奪取の先頭に立ったバスキ・ラフマツ(Basuki Rachmat)、アミール・マフムッド(Amir Machmud)、ユスフ(Mohammad Yusuf)の3人の将軍のうちバスキ・ラフマツは早く故人になったが、マフムッドは内相、ユスフは国防相になって当初のスハルト体制を支えたが、スハルトの独裁化とともに後に50人委員会などに参加して反スハルトを明らかにした。

る。

なぜならスマル(→906)はワヤン(→904)で馴染みのあるスーパーヒーロであり、ジャワ人に最も人気のあるキャラクターである。このような造語への配慮にも窺われるように《スカルノ》から《スハルト》への譲位は芝居がかっている。

スプル・スマル以降もスカルノ大統領は大統領職を放棄¹²したわけではない。その後も「大統領は自分でありスハルトは補佐役にすぎない」と外国の新聞記者に虚勢をはり波紋を巻き起こしたりした。しかし権力を使用する手段を奪われて裸になったスカルノ大統領は無視された。

1966年6月20日国民議会で3月11日令が承認された。1966年7月にスカルノの終身大統領の称号は剥奪された。スカルノ大統領派は内閣から追放され、新体制による政治が進められた。

8月の注目された独立記念の演説では執行部の政策を批判したことによりさらに窮地に追い詰められた。1967年2月国会でスカルノ大統領の解任が決議された。それから先の元大統領(→441)は幽閉同然であった。

1967年3月の国民協議会でスハルト将軍は大統領代行に任命され、ハムンク・ブウォノ9世(→445)とアダム・マリク(→447)がスハルト支持を明らかにした。スハルト将軍は1968年3月にインドネシア第2代大統領に就任した。

以降再選を重ね1998年に退任まで32年間のスハルト体制が続いた出発点はスプル・スマルである。スハルト大統領在任中は5年毎の国民協議会は3月11日(スハルト政権にとって意義ある日)に開催され大統領に推挙された。

スカルノ初代大統領からスハルト大統領への権力の移行は強引であるが合法という形はとられており、ジャワ流のムシャワラ(→594)の実践にも見える。時間がかかったのは中部・東部ジャワの師団、海軍や空軍にはスカルノ支持勢力が根強かったためである。もし事を急げばスカルノ派のクーデターもありえた。国軍の人事異動でスカルノ派(親共産党)の勢力をそぎながら慎重にスハルト体制を築き上げた。

389. 旧秩序から新秩序へ

スカルノ大統領が学生、知識人層、宗教関係者から飽きられたのは必ずしも共産党寄りの政治上の問題だけではない。独裁化の常としてスカルノ体制に対する反対意見はすべて弾圧され、自由な言論活動が禁止された。政敵はもとより、モフタル・ルビス(→965)などのスカルノを批判した言論人は投獄された。文化においてもレクラ(→990)という共産党系の文化組織が国の文化を壟断^{ろうだん}した。

マレーシア対決(→383)の掛け声は軍事的緊張をもたらし、国連脱退のスタンドプレーは国際的孤立を招いた。米英の資本主義国家をネコリン(新植民地主義)と悪し様にののしるスカルノ政権に外国からの経済支援は途絶えた。

1965年の9月30日事件はインドネシア現代史における政治事件のみならず社会的、文化的にも時代を画する事件であった。共産党が支援するスカルノ独裁政権の崩壊によってインドネシア人の精神衛生さえよ

¹² スカルノ大統領は必死に大統領権力を維持した。共産党の禁止を求める学生デモを背景に軍部の大統領への圧力から権力奪取が積み重ねられた。この間の事情は当時インドネシアに滞在した数少ない外国人ジャーナリストのレポートがある。著者はスカルノ大統領による反米政策に反感をもっており、スハルト将軍をインドネシアの共産化から救い、東南アジアの安定化をもたらした、という米国誌の立場にある。⇒Johan Hughes“the End of SUKARNO”

くなった。

インドネシアではスハルトが実権を握ることになり、新体制は新秩序による政治を掲げ、新政権をオルバ《ORBA＝新秩序》と称した。オルバと対照するため以前のスカルノ時代をオルマ《ORLA＝旧秩序》と称し、スカルノ体制を全面的に否定した。

スハルトの登場によってインドネシアの新しい時代が国民の期待とともに始まることとなった。新時代を表すオルバは国民に歓迎された。国民がどれほどスハルトに期待したかは当時の新聞の漫画では共産党のみならず旧体制の既得権者を一掃する実力者としてのスハルト将軍が願望をこめて描かれている。

ハムンク・ブウォノ 9 世(→445)、アダム・マリク(→447)の政治家がスハルト政権の支持を明らかにして政権に参加した。ハムンク・ブウォノ 9 世が内政、アダム・マリクが外交とスカルノ体制の軌道修正を行った。

スハルト政権の箔をつけるため、軍事政権でないことの証明のためにも両者の存在は不可欠であり、その後ハムンク・ブウォノ 9 世は 1973-78 年、アダム・マリクは 1978-83 年にスハルト政権の副大統領を務めた。

国際的に無名のスハルト大統領に代わって両者ともインドネシアの国際的に知られた政治家である。両名の尽力によってインドネシア新体制の国際的認知を容易にし、途絶えていた海外からの経済支援が再開された。

スハルト体制による開発政策の推進によって経済は明らかに良くなった。米英の関係は正常化し、IGGI(→483)などによる外国からの資本援助によってインドネシア経済は息を取り戻したが、一方では開発独裁(→392)という新たな問題を生じた。

期待されたスハルト政権であるが、馬脚を現すのにそんなに時間はかからなかった。国民はスカルノ大統領による〈カリスマ性容共独裁政権〉がスハルト大統領による〈軍事性反共独裁政権〉になっただけであることが次第に分かってきた。見せかけの民主主義、実態は軍事独裁という強権体制が国民にのしかかってきた。

390. マラリ事件

9 月 30 日事件以後、スハルト将軍は 1966 年 3 月に大統領代行に選出され、翌 1967 年に独立以来2回目の 12 年ぶりの国政選挙が行われ、現体制の国民の支持が明らかであるとして 1968 年に正式に第二代大統領に就任した。5 年後の 1972 年も国軍の有力者同士の牽制のため、結果的にスハルトが再選された。

スハルト体制の変遷を振り返ると二期目の 1974 年の 1 月 15 日に生じたマラリ事件¹³はスハルト支配への揺さぶりであり、この危機を乗り越えたことでスハルト体制は強化され、インドネシア内外を問わず誰も予想しなかった長期政権のステップとなった。

マラリ事件は日本の田中角栄首相が国賓として東南アジアを訪問しジャカルタに到着した際に起きた。日本のオーバプレゼンスが東南アジア全体に反日感情を醸し出しており、田中首相一行はすでにタイのバンコックでも反日デモの洗礼を受けていた。しかしジャカルタの様相ははるかに深刻であった。

反日のスローガンのデモが町にあふれていた 14 日夕方、田中首相のハリム空港到着とともに騒然とした状況になり、翌 15 日に頂点となりジャカルタ中央のタムリン通にある日本大使館はデモ隊の投石を受け、日章旗が引きずり降ろされた。

¹³ マラリ(Malali)は Malapetaka Limablas Januari(=1月15日の災厄)の略語である。別名“反日ジャカルタ暴動”ともいわれる

学生が主導する反日デモの抗議運動に便乗した暴徒がチャイナタウンの店の掠奪、放火を行う暴動となった。1000 台余りの日本製自動車破壊され、トヨタ・アストラ社(→522)の本社ビルが放火された。首都機能が麻痺する暴動となり、死者 8 人、負傷者 55 名、逮捕者 820 名をだした。

国民の期待で出発したスハルト政権であったが、その後、政治における民主主義の限界、開発政策による経済発展の成果の華僑・華人への集中、外国資本(その代表が日本)の横行への苛立ちと反感から“新秩序”に対する欲求不満のガスが充満していた。日本の田中角栄首相¹⁴の訪問がそのガスにマッチの火をつける契機となった。



スミトロ將軍

マラリ事件の真相は国軍内の権力抗争というのが定説である。スミトロ將軍は国軍司令官として国軍を背景に政治的野心を持っていた。これに対して大統領側近のムルトボ、スヨノ大統領補佐官などのアスプリ(Aspri)派が国軍と対立した。アスプリ派の日本経済界との癒着が目にあまるものがあり、アスプリ派批判のためスミトロ派によって反日デモが仕掛けられたらしい。

しかしアスプリ派はスミトロ派の動きを察知して逆手にとり逆襲に出た。アスプリ派の扇動によって反日デモは暴動に拡大し制御できなくなった。

大統領後継の最有力候補であったスミトロ將軍は治安責任者として解任された。この事件によってスハルト大統領は国際的には面子を失ったが、国内ではスミトロ將軍を蹴落とし権力基盤を確固たるものにした。スハルト大統領が国軍のトップ人事に介入し軍を私有化するようになったのはこの事件以降である。



アリ・ムルトボ將軍



スカルノ死去後の家族

Aman Yasin 氏提供

¹⁴ 田中角栄首相は 1972 年に自ら北京を訪れ中国と国交を回復し日中友好条約を締結したが、当時のインドネシアでは共産中国への憎悪が浸透していたこともマラリ事件の背景である。アメリカは石油確保について日本独自の産油国政策を推進しようとする田中角栄を牽制するためにインドネシアをけしかけたという説もある。

391. 軍事政権の鎧

スカルノ政権のナサコム(→380)という政治バランスは共産党の壊滅、イスラム勢力の後退で軍部のみが残った。9月30日事件で国軍が政権を取り、スハルト將軍が大統領に就いた。国軍にしてみればスハルトはその持ち駒の一つであり、大統領職は軍の幹部で持ち回りという意識であったであろう。

ところが一度、大統領になるや政権を離そうとしないスハルト大統領の去就をめぐる軍部内の権力抗争がマラリ事件であった。権力抗争をしのいだスハルト大統領は軍事政権の基盤を固め、長期政権に向かった。

当時の世界情勢においてインドネシア以外にも多くの軍事政権が跋扈したのはアメリカを盟主とする自由主義陣営からは反共でさえあれば軍事政権も国際的認知を得ることができたからである。

スハルト政権の内閣では軍人は国防大臣以外にも主要ポストを占め、当初は閣僚の半数以上が軍人であった。軍人は州知事の大半を占め、県・郡などの下部組織の要職も軍人が固めた。軍は職能集団であるゴルカル(→393)を政党に組織化し牛耳った。

外国大使、国営企業の社長も軍人出身者が占めた。個体として大使や社長に優秀な元軍人もいるが、実態は天下りポストであった。スハルト体制は実態として軍事国家であり、軍の横暴の源泉は軍人の二重機能(→373)の理念にあった。二重機能の名において国軍は將軍を濫造し、利権を漁り政権を私物化してきた。

国軍に割り当てられる政府任命議員には国軍の主流になれなかった人に与えられる名誉ポスト的役割があった。したがって国軍議員の中には正論を穿く人もいた。しかし所詮は体制維持のためのガス抜きにすぎなかった。巷間でささやかれたジョークは『以前は大臣が100人いた。今度は將軍が100人いる』であった。

スハルト大統領が権力抗争に勝ち抜き、長期政権を維持しえた背景にはムルトポがいた。スハルトの子飼いの軍人ムルトポ¹⁵はスハルトのディポヌゴロ師団当時の配下であった。9月30日事件でスハルト將軍が実権を握るやその側近(アスプリ)としてマラリ事件(→390)などの裏面工作にあたった。

軍の情報機関が重用され特殊工作部隊が組織された。1983年から86年にかけて、街に蔓延るプレマンなどのアウトローが何者かによって射殺され、刺青の死体が放置される事件が相次いだ。いわゆるペトルス事件¹⁶によって法的手続きなしに5千人から1万人が闇から闇へ葬られた。いわゆる“街の清掃プロジェクト”は特殊工作部隊によって実施されたものである。スハルト大統領は後に自伝で「彼らの死は当然の報いであり、みせしめだ」と自らが指示したことを誇っている。

1984年のムルトポの突然の死は謎¹⁷であるが、その際にムルトポ直属のならず者も一緒に整理されたらしい。ならず者がいなくなり街は平穏になったが、法治国家でない恐怖を市民に知らしめる効果は大きかった。

¹⁵ スハルト大統領の中部ジャワ時代からの配下であったアリ・ムルトポ(Ali Murtopo)將軍、スノノ將軍は9月30日事件でスハルト將軍が実権を握るやその側近として活躍した。アスプリ(Aspri=Asisten Pribadi 大統領特別補佐官)として政界や資金調達の実務を担当し、権力構造を複雑にし、影の内閣、見えない内閣などと国民などと批判を浴びていた。国軍の権力闘争において治安秩序回復司令官スミトロ將軍は国軍の頂点としてスハルト大統領の後継者の位置におり、ムルトポ將軍がライバルであった。スミトロ將軍は田中角栄首相のインドネシア訪問の際に学生が企んでいた反日デモを日本と癒着から評判の悪いアスプリ派追い落としの機会として放置しておいた。ところがムルトポはスミトロ派の企ての反日デモをさらに煽って放火・略奪の暴動に仕立てた。結果は事件をスミトロの治安責任問題に発展させ、スハルトの後継者争いから蹴り落とした。国民の批判をかわすためスハルト大統領はアスプリ制を廃止したが、その後ムルトポはOPSUS(特殊工作部隊)を組織した。ムルトポ配下のOPSUSは国民から憎悪された。しかし権力維持の陰謀はスハルト大統領ももてあまし警戒されだしたといわれる。

ムルトポとともにアスプリ派の双璧であったのはスジヨノ・フマルダニ(Sudjono Humardani 1923-86)である。ディポヌゴロ師団当時からスハルトの側近であった。経済担当として対日経済関係の中心人物であった。ジャワ神秘主義に傾倒し呪術でスハルト大統領に大きな影響を与え、インドネシアのラスプーチンといわれた。

¹⁶ <編者註>ミステリアスショットと新聞で騒がれていた。悪党に対するこの暗殺で町がだいぶ良くなった、

¹⁷ 1984年、ムルトポは心臓病で急逝した。ムルトポが死んで国民は安堵したが、最も安堵したのはスハルト大統領である。大統領はやりすぎのムルトポに脅威を感じ、もてあましていたからである。大統領にとってはタイミングよい突然の死であった。

392. 開発独裁

当初は選挙におけるスハルト体制の与党であるゴルカルは1971年選挙で63%の得票率で第一党になり、1977年、1982年と選挙毎に漸次得票率を上げ全27州において完全制覇を行い、1987年選挙のゴルカルの支持率は74%にも達した。

スハルト体制の基盤は当初は知識人、学生層、イスラム教関係者など軍以外にも幅広い層に支えられていたが、次第に軍人色が濃くなってきた。それにもかかわらずゴルカルの支持に見られるようにスハルト体制が不動のものとなったのは経済発展を図る開発政策のそれなりの成果があったからである。

スカルノ時代のインドネシアの一人当たり年間所得はインド、バングラデッシュ、ミャンマー、スリランカといった国と同程度で100ドル程度であったが、90年代初めに500ドル程度に増加しフィリピンと余り差がなくなった。

経済危機(→480)前は1000ドルにまで上がった。貧富の差が問題であるとか、石油の高騰に恵まれただけとかいう意見もある。しかしインドネシア経済のパイが大きくなり、国民のすべてがなにがしかの分け前に与ったのは事実である。

米が自給できるようになり、餓え死にする人がいなくなったことの意義を過小評価してはならない。“人民の胃袋”との対決において〈建国の父であるスカルノ〉は敗れ、〈開発の父であるスハルト〉は勝ったのである。

韓国の朴政権、台湾の蒋介石・蔣経国親子、これらの政権は軍事強権でもって民主主義勢力を圧迫し、在任期間中は人権抑圧の反民主主義として海外の進歩派からは袋たたきにされた。シンガポールのリー・クワンユー首相にしても軍事国家ではないが、権力の独裁化のためには選挙や報道について講じた手段は軍事政権並みである。

しかし経済の観点からこれらの国を見るとアジアの4匹の竜(英国植民地の香港を加える)として褒め称えられた国であり、強権政権の下において経済がテイクオフし、目覚しい経済発展を成し遂げた。

低開発国が先進国に追いつくためには経済発展に集中することが効率的であり、そのためには民主政治を犠牲にする独裁政権も必要である。道路やダムを造るために先進国と同じような民主的手続きを踏んでおれば時間を浪費するだけである。既に道路もダムも出来上がっている先進国の論理はインフラ経済基盤のない国への適用に無理がある。

低開発国に求められるのは政治的安定の上に急いで道路やダムの建設を強力に推し進める政権である。葬りさらされたスハルト政権もインドネシア歴史において経済発展に寄与したという観点から評価されることであろう。

欧米からとかく批判されるアジア全体の人権問題についても「アジアにはアジアの人権の考え方があり欧米のものとは別だ」と開き直りの弁はそれなりの実証を伴っている。

⇒485.国民所得の向上

393. ゴルカル/政府与党

ゴルカル(GOLKAR)は職能グループ(Golongan Karya)の略語であり、婦人団体、運転手組織などのあらゆる

る職業組織を網羅している。本来、ゴルカルは文字どおりの職能グループであるから政党の意味はない。

スカルノ大統領時代からゴルカルは国会、地方代表とともに国の最高機関である国民協議会(→370)の構成メンバーとして政治思想に基づく政党とは異なる形で国民の意思を代表するものと見なされていた。政党を国民の代表と認めたくない人の発想である。

スハルト体制において国軍はゴルカルを与党として選挙で支持を得ることにより、政局の安定を画策した。ゴルカルは公務員、国営企業の職員が中核となって組織化が推進され、既成政党を越えた存在として国民議会の選挙に参加した。

政党政治の行き詰まり、西欧的な議会制民主主義への違和感という点においてゴルカルは日本の太平洋戦争前の大政翼賛会と発想が似ている。

政治運営の試行錯誤の結果、西欧型の議会制民主主義は風土にあわないとしてスカルノは指導される民主主義(→379)を唱えた。スハルト体制はスカルノ体制の否定から出発しているが、政党政治による議会制民主主義という西欧的なものに対する忌避の姿勢は、スハルトとスカルノは同じ穴の^{むじな}貉である。

そもそも平穏・安定を志向するインドネシア人にとって、スカルノ時代、9月30日事件など政治の動乱を経て、国民は政治アレルギーから政府誘導のままにノンポリに陥った。

スハルト大統領は選挙に示された国民のゴルカル支持に基づいて1992年には六選を果たした。ゴルカルの得票率は漸次上昇した仕掛けは公務員はあらゆる手段を使いゴルカルの集票に努めたからである。

日本の選挙で郵政賊や道路賊が跋扈する程度^{ばつこ}の生易しいものではない。軍も警察も含め全官庁がこぞってゴルカルへの集票をやった。当時のゴルカルはABCといわれた。AはABRI(インドネシア国軍)、Bは官僚(Birokrat)、Cはチュンダナ(→161)がゴルカルを操っているという意味である。

選挙においても野党の候補者は政府の審査を受け、政府が気に入らない有力な野党候補をリストから外すなど当局の選挙への干渉は露骨であった。ゴルカルの選挙は俗にブルドーザー作戦といわれる。八百長選挙でゴルカルは圧倒的勝利をえた。

スハルト体制においてゴルカルに対抗する野党の生存は許された。1973年、乱立していた政党は政府の指導でグループ化され、一つはイスラム系の「開発統一党(PPP)」である。インドネシアのイスラムの多様性から政治活動への求心力はなかった。

もう一つは「インドネシア民主党(PDI)」である。PDIはムルバ(→295)、PNI(→293)、キリスト教系政党の寄り合いであるため、内紛が絶えず、しばしば政府が仲裁をした。スハルト体制におけるインドネシアの野党は政府によって管理された官製野党であった。

394. 国軍との綱引き

スカルノ大統領時代は陸・海・空・警察の4軍並列であったが、スハルト大統領が行った改革は国軍司令官が陸、海、空軍に警察を掌握し指揮権を一元化した。国軍は巨大勢力となり、共産党を抹殺し、イスラム勢力をも圧倒し、スカルノ時代のナサコム(→380)の三竦^{さんすく}みの牽制関係から軍部だけが突出した。以降のインドネシアは陸軍主導の軍事国家であり、スハルト大統領は軍の出身で軍事政権の頂点にいた。

見方を変えるとスハルト大統領も当初は国軍に担^{みこし}がれた神輿であった。国軍の中にも勢力争いはあり、マ

マリ事件(→390)は神輿の担ぎ手同士の内輪もめであった。以降、スハルト大統領の個人的権勢が強まるにつれ、軍に対して人事権を嵩に次第に優位に立ち神輿が指図をするようになった。

軍事政権でありながら次第にスハルト大統領個人の独裁政権に変容していくことである。その過程は大統領の軍部に対する巧妙な人事政策である。マリ事件で失脚したスミトロ将軍に続き、スロノ国軍副司令官やユスフ国防大臣などが大統領候補として名が取り沙汰されやいなや対抗馬とならないように巧妙な方法で左遷された。

スハルト大統領が国軍最高幹部の人事権を把握するようになってからの特徴は国軍の最高位にジャワ人とイスラム教徒を回避することである。“ナンバー2”となって大統領の地位を脅かす恐れがあるからである。当時からインドネシアにおける大統領になるための3要件は、①軍人、②イスラム教徒、③ジャワ人であるといわれてきた。

例えばパンガベアン(Panggabean1922-)は国軍司令官、政治治安調整相を歴任し初期スハルト体制の軍事最高位であったが、バタック人(→607)のキリスト教徒であったため、大統領の後継者にはなれなかった。



ベニー・ムルダニ将軍

1983年にそれまで陸軍主流でなかった情報機関出身のムルダニ¹⁸を重宝して国軍司令官にした。彼はキリスト教徒でユーラシアン(→685)の混血であった。彼は辣腕^{らつわん}を發揮して国軍機構の改革し、国軍組織を単純化して国軍司令官の権勢を築いた。

ムルダニはイスラム教徒弾圧のタンジュン・プリオク事件(→167)の当事者である。ムルダニの国軍の掌握が完璧になると豪腕に不気味なものを感じたスハルト大統領は、1988年に国防治安大臣に左遷して軍の指揮権を外した。ムルダニのクーデターを恐れたからといわれている。

また、彼は将来が嘱望される若い軍人を大統領秘書官として派遣させ、大統領の子飼いにすることであった。以降の彼らは出世街道^{へくしん}を驀進し軍の幹部に就任した。トリ・ストリスノ副大統領¹⁹やウィラント国軍司令官(→414)は大統領秘書官の経歴を経ている。

将軍達にはライバルを立て競わせることで分断化した。人事で軍を操縦しても軍の中からスハルト多選を疑問視する声はでる。そこでスハルト大統領はにわか仕込みの熱心なムスリム²⁰になってイスラムを取り込み

¹⁸ ムルダニ(Beny Murdani 1932-2004)は国家における国軍の役割がスハルト体制の下で問われている時、国軍の一つの時代を築いた。ムルダニはスラウェシ島⇒中部ジャワ出身の鉄道会社役員の子弟である。母はユーラシアンであり、カトリック教徒である。1950年にバンドゥンに設けられた陸軍養成学校を出、45年世代とマゲラン世代との橋渡し世代になる。海外勤務の経験が豊富で米国、シンガポール、マレーシア、韓国に人脈を築いた。ムルダニは色々な戦闘に参加したが、国軍内の基盤は情報部にある。1983年に情報次長から軍の最高ポストの国軍司令官へ昇進した。それまで国軍の主流は作戦部であったので、スハルト大統領の人事壟断として国軍内部に衝撃を与えた。ムルダニはスハルト大統領の取り巻きメンバーとして発言力を増し、強権政治の挺入れを行った。1983年、ジャワ各地でガリといわれるならず者が大量に殺されるペトルス事件があった。1984年にタンジュンプリオクのイスラム教徒が弾圧される事件があった。両事件の責任者と目されるのがムルダニである。国軍は聖域であり誰もが手をつけられない伏魔殿であったが、強権でもって国軍の改革を進めた。それまでの国軍は地方において軍閥化する傾向にあった。ムルダニは中央からの指揮系統を簡略化しジャカルタからの支配を強化した。県、郡の行政レベルにおける国軍の支配を貫徹し、国軍司令官の優位を確立した。スハルト大統領は、次第にムルダニの国軍への影響力を警戒するようになった。1988年2月、大統領は突如ムルダニ国軍司令官を解職し国防大臣に左遷した。

¹⁹ トリ・ストリスノ(Try Soetrisno)は1993-1998年の副大統領である。彼は1959年陸軍技術学校卒業以降、1970代半ばにスハルト大統領の副官となって大統領の信頼を得たといわれる。その後はジャカルタ地域軍管区司令官、陸軍参謀長、国軍司令官と国軍の主流を歩んで最高ポストにいたる経歴をへている。トリ・ストリスノはたまたま副大統領の改選時期に国軍司令官であったので国軍から押し込まれて副大統領になったもので本人の政治的手腕の故ではない。1998年のスハルト後継者の本命であったが、スハルト大統領が副大統領にハビビに固執すると国軍はトリ・ストリスノの再選を諦め、過去の人になった。

²⁰ スハルト大統領は9月30日事件直後はイスラムを味方にして共産党を殲滅した。一旦、共産党の恐怖がなくなるとイスラム教過激派を弾圧し、脱宗教(イスラム)に努めた。しかし1991年には家族を伴いメッカ巡礼を行い敬虔なムスリムであるポーズ

軍を牽制した。

⇒374.国軍の組織

395. KKNのシンボル

スハルト政権末期の頃から言われ出した KKN とは Kolusi (馴れ合い)、Korupsi (汚職)、Nepotisme (縁故) の略語である。KKN はインドネシア社会の癌^{がん}であることは誰もが認めるところである。しかしながら KKN の言葉の風靡^{ふうび}の原因はスハルト体制の象徴としてであった。

“KKN 打倒”との主張には当局側も弾圧できない。じつは“スハルト体制打倒”をいい代えたものであり、KKN はスハルトの身代わりに生み出された言葉である。

汚職(→749)はインドネシア社会の病根であってスハルト大統領個人の問題ではない。しかし大統領とスハルト一族の略奪の凄まじいばかりである。大統領を見習うことで汚職はスハルト体制に蔓延^{まんえん}していた。

スハルト一族もさることながら大統領個人の蓄財はヤヤサン(→748)といわれる財団である。スハルトの支配していた財団の代表的なものはスプルスマル(Supersemar)財団、ダルマイス(Dharmais)財団、ダカブ(Dakab)財団、その他にも自立福祉財団(YDSM)、永遠の事業財団、希望財団、蓮華の花財団等々である。財団の名目は貧しい家庭への奨学金供与とか孤児への援助という立派な看板を挙げている。

国営企業は収益の 5%をこれらの財団への寄付することを法令で定めた。高額所得者や民間企業などからも強制的に徴収した。確かに集めた金の一部は看板どおりに使用されてであろう。しかし財団の会計は不透明であり、多額の資金の運用先がファミリー・ビジネス(→492)やチュコン企業(→491)に流れた。大統領一族は利権に食らいつき、国家を食い物にしていた。

縁故はゴトロンヨン社会(→593)の派生である。偉くなった人に一族が群がり、その余得が一族に及ぶことは家族主義(→573)美德である。ゴルカルの役員や国民協議会議員に大統領の息子やその妻も名を連ね、スハルト大統領の縁故人事は目に余るようになった。

ティエン夫人は軍の人事へ関与するようになった。一時はスハルト大統領の後継者として評判の高かったウイスモヨ・アリスムナンダル(Wismoyo Arismunandar)将軍はティエン夫人の義理の弟である。1992 年陸軍戦略予備軍司令官から陸軍参謀次長に、1993 年陸軍参謀長に就任し次は国軍司令官と軍の最高ポストが用意されていたが、突如引退を余儀なくされてスハルト後継者への道はなくなった。

失墜の理由は女性問題のゴシップでティエン夫人の忌諱^{きい}にふれたからといわれる。後継者候補になったのも降ろされたのも夫人の思惑であり、インドネシアの NO.2 の存在を示した。

スハルト大統領は人事の神様のように巧妙な人事によって国軍を自家菜籠^{じかやくらうちゅう}中の物にした。この中でも特に注目されたのが次女の娘婿プラボウオ(→452)であった。後継者と目せられただけに人事の都度、プラボウオの昇進が話題になった。

⇒451.スハルト夫人

をとった。1993 年の大統領選挙に向けてスハルトは再選の意向であったが、6選に対して各界に批判が相次ぎ、軍部でもスハルト大統領を担ぐことに消極的であった。このためイスラム教徒のスハルト再選の動員を行った。また 1990 年に腹心のハビビにイスラム教知識者協会を組織させシンクタンクにし、それまで冷遇されていたイスラム知識人に陽が当たりだした。

396. 50人請願グループ

スハルト体制が強化されるに従い、次第に軍事国家、独裁国家の様相が明らかになる。1978年にはスハルト3選に反対する学生のデモがあったが、踏み潰された。体制への批判も声が小さくなり、ついにはほとんど聞かれなくなった時にかろうじて批判の命脈を保ったのはNGO活動²¹などエリート層の良識派である。

その中で「50人請願グループ(Petisi 50)」はパンチャシラの一面的解釈(→366)と偏向に対する請願という名のスハルト体制批判の声明を行った。さらに1990年5月に活動を再開、スハルト大統領の退陣、言論の自由など6項目の嘆願書を国会へ提出し、50人請願グループの存在を顕示した。もちろんインドネシアの新聞などのメディアには報じられていない。

声明に署名した50人にはイスラム関係者、学生、知識人、政治家もいる。政治家にはナシール(→417)、ハラハップ(Harahap)など歴代の元首相もいる。主力は高名な退役の元将軍グループに相乗りしたものである。

スハルト将軍は僥倖により大統領になったが、大統領になってもおかしくない軍人は他にも大勢いた。50人請願グループはそのリストともいえる。とりわけ同じ穴の貉^{むじな}であるベキナスティオン将軍(→448)、ダルソノ将軍²²など元軍人からの民主主義を求める批判はスハルト体制に耳障りであったろう。スハルト体制誕生のスブル・スマル(→387)の時の立役者の将軍の一人もメンバーである。

署名者は公的地位を追われたり、経済活動を制限されたり、出国を禁止された。騒擾事件^{そうじょう}が起きればその黒幕として取調べられた。彼らは体制内批判派でスハルト体制の転覆を意図したものでない。スハルト体制の横暴がひどすぎるので改良を勧告したにすぎない。しかしこれらの先輩、同僚ともいうべきメンバーに対してスハルト体制が行った回答は軟禁することであった。1993年になって少し緩和されメンバーも公式の場に姿を見せるようになった。

その他の請願署名の著名人数名を紹介しておく。元ジャカルタ特別州知事のサディキン(AliSadikin)は海軍の出身であり、スカルノ大統領時代に海軍大臣を経験している。9月30日事件以降は陸軍が主導権をとる中で海軍出身というハンディにもかかわらず、10年間首都の知事を務めた。ジャカルタの近代都市への転身は彼の功勞とされている。名知事として特に中産階級に人気が高かった。1977年にはスハルトの第三期目に代わって大統領候補に推す動きもあった。

元警察軍司令官フグン・イマン・サントソは規律に厳しく汚職のない人物であった。高級外車の密輸事件を捜査した背後の大物を明らかにしようとして解任された。引退後は音楽の趣味を生かし演奏活動を行っていたが、50人グループに参加以来TV放送から締め出された。

²¹ インドネシアでは1980年代よりNGOが活発化する。有力NGOは1000人のスタッフを抱え海外NGOと連携を保ちながら農村開発、技能訓練、環境問題、小規模企業支援を行ってきた。インドネシアでは議会政治が機能していなかったため、政治を補完する形で登場し、次第にスハルト体制批判も行うようになった。LSM(Lembaga Swadaya Masyarakat)などがその最先端であった。これらのNGO活動は海外NGOと連携しているためスハルト体制側は弾圧の強硬手段をとりにくかった。

²² ダルソノ(H.R.Dharsono)将軍はスハルト大統領批判の元軍人である。シリワンギ師団長から更迭され、駐タイ大使になった。その後カンボジア大使をへてASEANの事務局長を勤めたが、その間も政府批判のため解任(1978年)された。1984年にはタンジュンプリオク暴動への政府の対応を批判したが、事件の首謀者としてダルソノは逮捕され、10年の実刑を宣告され投獄されたが、1990年に釈放された。出所後もナスティオン将軍、サディキン将軍等と50人請願グループの中心人物としてスハルト大統領批判を行い、1998年の政変にいたるまでスハルト大統領の辞任を呼びかけ、民主化を求める勢力を鼓舞した。

397. 7月27日事件

長期独裁政権スハルトに立てついてきたのは因縁の人物である。1965年9月30日事件(→384)でスハルトが引きずり降ろした前大統領スカルノの娘メガワティである。

ゴルカル体制の下で野党は完全に飼いならされていた。野党人事についても政府の干渉を受けてきたが、政府の油断に乗じて1994年にPDIでメガワティ女史が党首になるというハプニング²³が生じた。

スカルノ一族は政治から遠ざかることで生き長らえた。時代の経過する間にスカルノの悪名は風化し、野党PDI(→393)は1987年選挙にスカルノ一族を担ぎ出して成功を収めた。PDI党首になったメガワティは1998年の大統領選挙²⁴出馬を表明した。

対立候補なしの満場一致で選出されるのを慣例にしてきた当局はスハルト大統領の名に傷がつくのを恐れて強引にメダンでお手盛りのPDI総会を開催させた。遠隔地メダンで当局側の意に沿う党員を集めた党総会でメガワティ党首を解任した。

首都ジャカルタではPDI人事への政府介入に反発するメガワティ支持派が連日デモを行っていた。1996年7月27日早朝、メダンの党大会の解任決議無効を訴えるメガワティ派の立てこもるジャカルタのPDI本部事務所は襲われた。襲ったのはPDI新党首スラヤディ(Suryadi)派であるが、実態はプレマン(preman=チンピラ)を率いる特殊部隊である。これに憤る群衆でジャカルタ市内は騒然となった。

政府は7月27日事件を口実に直ちに民主化運動の弾圧を行った。1997年5月の選挙に備え、メガワティ派と体制外の野党のPRD(民主人民党)を壊滅させる意図である。PRDは学生を主とするスハルト体制批判の政党である。PRDが事件の黒幕にいるとしてブディマン・スジヤトモコPRD議長を逮捕した。

内外の批判に応えた公式発表は強制排除により死者5名、行方不明23名であるが、他にも多くの活動家が行方不明であった。行方不明とは特殊部隊に拉致されたことはインドネシアの常識である。たまに行方不明者が解放されることがある。解放された者は何があったかを決して話さない。語らない理由を詮索するのはインドネシア音痴である。

行方不明になっていた活動家の一人ピウス(Pius)は人権委員会の要求により釈放された。ピウスはヨーロッパに亡命してから特殊部隊に誘拐され行方不明期間中の拷問について証言した。誰もが予想していたようなことで目新しいことはなかった。しかし西欧諸国は改めてスハルト政権の暗黒ぶりにショックを受け、スハルト政権への嫌悪感が一層強まった。

インドネシア人の見た白昼夢のワヤン(→904)は、非道の魔王によって毒殺された前王の娘が成長してS大魔王に対決を挑む。健気な娘は蠅螂の斧を振りかざすが大魔王はいとも軽くひねりつぶす。第一巻の終わりである。大魔王によって押しつぶされたかに見えたが、慢心の大魔王に驕りの間に娘が生き返った。引き続いて第二巻の始まりである。

²³ 1993年、PDIの活動に危機を予感した体制側はPDIの党首の首の挿げ替えを行おうとした。その間隙にメガワティが党首に選出され体制側はあわてたが後の祭りであった。スハルト体制は堅固であったため政治主張の明らかなメガワティのPDIの様子を見ていたが、メガワティを担ぐ連中を座視できなくなった。メガワティは反イスラム派の華人やキリスト教徒や国軍によって担がれた神輿であり、スカルノ大統領の理念とは関係ない。メガワティ自身は木偶の坊であってもスカルノを指示する記号であることに若い世代は意味をこめている。

²⁴ これまでの大統領選挙は対立候補はなかった。1998年の大統領選挙にメガワティが立候補しても議員選出システムからメガワティが当選することはありえない。大統領選挙が行われることでスハルト大統領のカリスマ性に傷つくことを恐れたからであろう。スハルト大統領は老い先が短くなると完全に葬り去ったはずのスカルノの亡霊に怯えたこともありうる。このためスハルト一族の栄華の永遠のためになりふりかまわずにメガワティを引きずり降ろした。またスハルト一族がメガワティに敵意をいだいた理由にはメガワティとスハルト大統領の長女トウトウトとの女の嫉妬という関係を指摘する人もいる。

398. 1997年シラケ選挙

PDI党首を解任されたメガワティ女史は1997年選挙の候補者名簿にも拒否された。新党結成も拒否され、PDIに投じられていたメガワティ票の行く先がなくなった。選挙ボイコット運動や野党 PPP との共闘も当局に妨害された。抗議すれば都度逮捕者を出した。白けた選挙が1997年5月に予定通り行なわれた。

スハルト体制のインドネシアでは3政党しか認められていなかった。まず与党のゴルカル(→393)は本来は政党ではない。

民主党(PDI)と開発統一党(PPP)が政府公認の野党である。政府が管理しやすいように既存政党のイスラム系をPPPに、それ以外をPDIに編成したものである。当局にとって、本来、野党などは邪魔なだけであるが、パンチャシラ体制の受け入れを条件にガス抜きも兼ね、民主主義制度をみせかけるため存在を許容されてきた。従ってメガワティのような危険な野党になる存在は芽はのうちに摘み取られた。

政府の管理するインドネシアの選挙は面白い規制が多い。例えば選挙運動の際も政策論議は国を分裂させるから政見を言うてはならない。要は与党ゴルカルに利権はあっても政見らしきものはないので野党と比較されないためである。

政党支持者の間で衝突が生じないようにと政党別に選挙運動の日が割り当てられる。投票の一週間前に選挙運動を終える。頭を冷やして投票に行くための冷却期間である。この間に裏面工作をやる。

運動期間中は政党のシンボルマークの旗と政党カラーが全土に漲る。カンパニュー²⁵という選挙騒動である。若者が人が鈴なりになった車を連ねて行進する。自党の旗やカラーをつけていない車を威嚇する。暴走族まがいの運転で交通事故が起き、死者が続出する。カンパニューの馬鹿騒ぎが選挙運動に限って認められたのは真面目な政党活動より危険が少ないという判断であろう。要するに選挙のお祭り化である。

公務員は職場で投票した。休日に居住地で投票できるようにしてほしい、という何ともいじらしい要求でさえ無視してきた。字が書けない人に選挙権を行使させるという大義名分の下に針で穴をあける投票方法は開票集計作業を故意に複雑にしている。複雑な開票作業は不正の温床である。

ゴルカルの得票率が低いと政府はその地域に仕返しをするのがこれまでの慣習であった。したがって地方機関の首長は自分の栄進のためにも日常業務として選挙対策に専念した。

1997年の選挙は従来にもましてひどかった。選挙忌避感^{みなぎ}が漲るにつれゴルカルは自党への投票よりもっぱら棄権防止を呼びかけた。選挙近づく^{いかく}とジャカルタの都心ではヘリコプターによる武器を帯同した軍の降下訓練デモンストレーションでもって国民を選挙に行くように威嚇した。選挙へ行かすさえすれば開票結果は^{いかく}どうにでもなるということらしかった。そして5月選挙の結果は投票率は高く、ゴルカルの得票率は以前よりも増えた。結果はゴルカルの圧勝とメガワティ抜きのPDIの惨敗、PPPの現状維持である。

399. 通貨危機の衝撃

1997年選挙の空しさにもかかわらず、ゴルカルの圧勝を国民の信任をえたとしてスハルトの大統領7選は

²⁵ カンパニュー(kampanye)は英語のキャンペーンのインドネシア語である。

既成事実になった。何もかも順調に見えたスハルト基盤を揺るがしたのはクリスモン²⁶といわれる通貨危機に始まるインドネシア経済への痛撃である。

暴落するルピアに対してインドネシアは10月にIMFに救援を要請し、IMFのカムドシュ専務理事は金融支援を発表した。1998年1月15日、IMFの資金援助の条件として、経済の構造改革に関する協定が調印された。スハルト大統領が署名している傍らで、立会人のIMFのカムドシュ専務理事が腕組みして見下ろしている写真はインドネシア国内はもとより世界中に報道された。

歴史の証人として後世に残るいくつかの写真がある。私は日本の敗戦を象徴する2点の写真を思い出す。1945年9月2日、日本は東京湾に米国戦艦ミズリー号に呼び付けられ、日本全権代表の時の外務大臣重光葵は、砲にまたがって見物する鈴なりの水兵に見下ろされる中で、降伏文書に調印した。

もう1点は昭和天皇がマッカーサー元帥を訪れ二人が並ぶ写真は新聞の一面に掲載された。礼服姿の天皇の隣に日常の軍服姿で手にパイプを持ったマッカーサーの並ぶ写真である。身長の違いはもとより勝者と敗者を象徴するものであった。

元に戻るとIMFとのスハルト大統領の調印の写真は日本の降伏調印の写真と同じくらい象徴的であった。カムドシュ理事は腕組みして見下ろしていたが、インドネシアでは腕組みはカサル(→634)な攻撃の姿勢として忌避²⁷されている。IMFの理事がそこまで知ってやったのか、本当に知らなかったのかは分からない。

大統領が身を屈して署名している有様は降伏文書さながらであった。インドネシア国民が不可侵と信じていた元首の惨めな格好は“落ちた偶像”であった。

屈辱の怒りに燃えたのか、初めからその気であったのかスハルト大統領はIMFの突きつけた条件である大型プロジェクトの棚上げや補助金の中止を本気で実施するようには見えなかった。発表された政府予算案はIMFの勧告に逆らうものであり、国際金融筋でインドネシアへの政治不信感はつり、ルピアはさらに低下した。

アジアを連鎖反動的に襲った通貨危機であるが、タイ、韓国ではIMF支援が明らかになると下落は▲30%程度で止まった。しかしインドネシアでは大統領選出の日程とあいまってインドネシアの通貨危機は▲85%にも達し、他国とはかけ離れた暴落となった。通貨の下落は金融危機となり銀行の取付け、企業の倒産、失業者の増大と経済危機に拡大し、政治危機から社会危機の様相を帯びるようになった。

経済危機と政治危機のスパイラルアップで止まらないルピアの下落は国民の生活を覆し、各地で暴動が発生した。振り返れば、初代スカルノ大統領を倒したのは経済であった。そして再びインドネシア大統領は経済によって足元を掬われた。

⇒480.1997年経済危機

²⁶ 通貨危機(Krisis Moneter)のシンカタンのクリスモン(Krismon)が一躍流行語になった。日本人は「クルシイモンネ！」と慰めあった。

²⁷ 独立記念日の行事に招かれた日本人が国旗掲揚の儀式の際に腕組をしていたため不敬罪で呼び出しを受けたことがある。

400. 政権への執着

インドネシアでは押されて大統領になるというポーズをとり、スハルト大統領も踏襲してきた。しかし七選に対してはスハルト自らがこれまでになく再選の意欲をあまりにも露にしたことはインドネシアの政情不安を予測させるものであった。

スハルトが一応曲がりなりにも選挙というプロセスを経て大統領を続けてこられたのは、スハルト以外の人が大統領になった場合、政治的不安によってせつかくうまく成長していた経済が停滞することを恐れる気持ちが国民にあったことは事実であろう。大統領になるべき人が他にいないからやむを得ない、という消極的選択を余儀なくされた結果である。

しかしスハルト大統領が故意に後継者を育てなかったのは歴代の副大統領をみればわかる。第2期(1973年)の副大統領のハムングブウォノ9世(→445)、第3期(1978年)は外交官のアダム・マリク(→447)はスカルノ体制の混迷の後始末をして政権から去った。

問題はスハルトの独裁体制の次第に整った第4期(1983年)以降の副大統領である。文官を据えるという配慮もなくなり、第4期の副大統領ウマル・ウィラハディスクスマ(UmarWirahadikusumah1924-)は45年世代(→319)の軍人で陸軍参謀総長、会計検査院長官を務めた政治野心のない人畜無害の退役軍人である。勲章代わりに副大統領候補になって本人もびっくりしたはずだ。

次の5期(1988年)は側近として仕えてきたスダルモノ(Sudharmono1927-)前官房長官である。軍人出身であるが、法務畑のため実戦畑の経験がなく師団長の経歴もなかった。ゴルカルを組織化しスハルト体制を支え、大統領の信望は厚かったが、国軍の主流である作戦派との折り合いがよくなかった。

スハルトは6期(1993年)もスダルモノを副大統領に再選したいという意向であったが、スダルモノに対する軍の反発が露であった。大統領も妥協して国軍の意向にかなうトリ・ストリスノ国軍司令官を受け入れた。

トリ・ストリスノ自身は副官としてスハルトに仕えたことが、国軍司令官になれたのであり、個体として権力欲があからさまでないことがスハルトに受け入れられたのであろう。

大統領にもしものことがあることに備えて軍のプレッシャーを受けた妥協人事である。トリ・ストリスノが軍の最高位から副大統領に転じたことにより、スハルト⇒トリ・ストリスノの軍部による政権の移行は円滑化が予想された。

スハルトの健康の衰えは明らかであったが、5年たって第7期(1998年)になっても大方の期待を裏切りさらに再選の意向を明らかにした。副大統領候補にトリ・ストリスノをも替える意向が明らかにしたが、国軍が軍人候補を出さなかったのはスハルトと一蓮托生を避けたのであろう。

スハルト大統領は娘のトゥトゥット(→452)を後継大統領にしたがっていると慮った取り巻き連中が娘を担ぎ出そうとしたが、ハビビを副大統領候補に指名したのは後継者というよりは娘への道を拓く中継ぎが本心だったようだ。

401. ハビビ副大統領

一般選挙の翌年の1998年が大統領選挙である。しかしこれまでは与党ゴルカルの勝利を受けて対立候補もなく、与野党全員一致でスハルト再選を支持してきた。したがって選挙といっても5年毎に行われるスハ

ルト大統領就任の儀式にすぎなかった。

スハルトが再選の意向を明らかにしたため、大統領円満にスハルト大統領に辞めてもらうには万策つきた感があった。大統領が死ぬのを待たせられ、副大統領の人選に関心が集まった。これまでと異なり、副大統領候補に関心が高かったのは、大統領が任期中に退任すれば憲法では副大統領が大統領になるからである。

国軍は前回 1993 年にはトリ・ストリスノ国軍司令官をゴリ押しに送り込んだが、1998 年には静観をきめこんだ。スハルトという“泥船”と一緒に乗るリスクを避けているように見えた。

副大統領候補の選定はスハルトの恣意に委ねられた。巷間に噂された候補はハルト情報大臣、ハビビ科学技術大臣、ギナンジャーラ開発企画庁長官などとともにスハルトの長女トゥット(→452)も有力な候補であった。

最終的にスハルトが選択した候補者がハビビ科学技術大臣である。ハビビの名は五選・六選の際にもダークホース的存在であった。スハルトの気に入りであったが、軍部に受け入れられないのほとにかくとして、国民の人気もなかった。

軍人でなく文民のハビビの副大統領選出をインドネシアの民主化というわけにはいかない。ハビビはよくてスハルト家の家宰、科学技術のほら話でボケ老人を幻惑するスハルトの幫間というのが国民の大方の評価であった。スハルトはもう一期ががんばって次期に娘を大統領にするための地ならしのつもりらしかった。

欲ボケ老人と幫間という最低の組み合わせに国民は失望した。海外も呆れた、その結果、副大統領候補がハビビであることが明らかになるとルピアはさらに 14%下落した。スハルト・ハビビ体制にインドネシアの行く末を案じた結果である。

ハビビ自身にも黒い噂が付きまとった。旧東ドイツの海軍の艦船 100 隻を軍に相談もなくまとめて引き取ったが、10 億ドルの修繕が必要であっただけに軍部を怒らせた。胡散臭い金のやり取りがあっただけ。この記事が原因でテンボ誌が発禁(→752)に追い込まれた。

インドネシアの大統領の条件は次の3点、軍人、ジャワ人、ムスリムであるといわれてきた。ハビビは軍人でない、またジャワ人ではなくスラウェシ島出身である。ムスリムであることだけが条件に該当する。振り返ればハビビは ICMII(→405)を主宰しイスラム教に熱心であったのはムスリムであることを政治的に最大限に利用しようとしたのであろう。

ハビビ副大統領は後に大統領になり、再選されることなく政界を去った。最近では優秀な大統領であったとの評価も出てきたが、インドネシア大統領になるための外島出身者への壁は厚かった。

⇒454.ハビビ大統領

402. 暴動の列島連鎖

1996 年7月 27 日事件(→397)のやり場のない憤りからインドネシア各地で暴動事件が続いた。1996 年10月、東部ジャワのシトゥボンド(Situbondo)、12 月、西部ジャワのタシクマラヤでは些細なトラブルをきっかけにイスラム教徒がキリスト教会や華人の商店を襲った。昔からのインドネシアにおける為政者への憤懣表示のパターンである。

通貨危機による経済危機が国民の生活を脅かすにいたり、政治問題は経済問題と相乗して列島各地に

暴動が相次いだ。街には「物価を下げろ」というプラカードがあふれた。大統領選出という政治問題の時期に「物価を下げろ」とインドネシア人が物価にこだわるのは、生活が追いつめられているからである。フランス革命の発端となったバスチーユ監獄襲撃に向かう暴徒も「パンをよこせ」と叫んだ。

しかしインドネシアのプラカードには単なる物価以上のものをこめている。インドネシア語の物価はハルガ(harga)である。ハルガに“スハルト一族”の意味をこめている。その心は「SUHARTO dan KELUARGA」である。言いたいのは「スハルトと一族を引き降ろせ」ということである。

1997年3月11日のMPRでスハルト大統領の再選とハビビ副大統領を選出した。従来型の大統領と副大統領選出のセレモニー的MPRはこれが最後となった。

スハルト大統領が副大統領にハビビを指名したこと批判はあっても軍人でないという事実は一つの見識であった。しかし3月14日に発表された内閣の顔ぶれを見て国内も国外も驚いた、というよりは呆れた。特記すべきは娘のトゥトゥット(→452)の社会大臣とボブハッサン(→681)が経済大臣になったことである。まさに第7次腐臭内閣であった。

首都ジャカルタでは厳戒警備体制で学生デモは足止めされた。ジョグジャやソロの大学のデモではスハルト退陣が公然と叫ばれるようになった。スハルト打倒のスローガンは地方から中央へ怒涛のようにジャカルタの大学に押し寄せた。

IMFの勧告(→497)に従い、1998年5月4日、政府はガソリンや電気代を値上げを発表した。これに反発した暴動がまずメダンに発生し各地に連鎖した。インドネシア側の抗弁にもかかわらず、IMFが政治的配慮もなく経済改革として石油価格の値上げを迫ったのはスハルト大統領引きずり落としのアメリカの策略であるという説もある。

5月政変の一連の流れにおいて石油価格引き上げは大きな衝撃であった。物価の値下げ要求はやがて【レフォルマシ(REFORMASI=改革)】を求めるプラカードに変わった。日本では保守政党でさえ年から年中、改革を唱えているが、インドネシアでは現体制の変更を意味する改革という用語はタブーであった。

華人系の商店もREFORMASIのスローガンを看板代わりに掲げた。その意図はデモ隊への迎合であり、略奪を逃れる免罪符のつもりであった。

32年前スハルトの出現とともに唱えられたオルバ=新体制(→389)の呪文は色あせてレフォルマシ一色に置き換わった。

403. 首都騒乱

【5月12日】ジャカルタに私立の名門トリサクティ大学²⁸でレフォルマシ(改革)要求のデモを行った。デモの勢いとして校外に若干はみ出すことは警察当局と事前の了解があった。

そこへ突如現れたのが治安部隊である。治安部隊は警察とは別組織で陸軍の戦略予備軍の下にあって特別の訓練を受けたエリート部隊である。銃を水平に発射し学生4人(6人という情報もある)が射殺された。

これを見た学生・市民はいきり立ち、伝播して暴動化した。トリサクティ大学での治安部隊の発砲の様子はTVで伝えられた。インドネシアのTVのニュース報道は規制されていたが、外国の衛星放送が見られる状況

²⁸ トリサクティ(Trisakti)は「三つの超自然」という意味でヒンドゥー教のブラマー、シバ、ヴィシュヌの三主神を意味する。インドネシアの私立大学は宗教系が多いが、トリサクティ大学は宗教とは関係なく学生には良家の子女が多い。

では報道規制も効かなかった。

【5月13～14日】ジャカルタで大規模な暴動が発生した。焼き討ちされたスーパーを略奪していた民衆が火災に巻き込まれて1200名が焼死²⁹した。

ジャカルタ暴動事件は二つの現象を兼ねている。一つはその日暮らしの貧民が商店に押し入り商品を略奪した。スーパーで火事に巻き込まれ大量の死者を出した。

もう一つは学生などが改革を要求する政治活動である。彼らは腐敗政権の退陣と民主化を求める真摯な政治活動である。

新聞やTVでは両者を区別することなく、燃えるスーパーや品物を抱える暴徒の映像が伝えられた。その裏には暴動を扇動して社会危機をつくりだし、治安回復を口実に政治活動を弾圧しようとする国軍内の一派³⁰が暗躍した。外国人の国外脱出が始まった。

【5月15日】スハルト大統領は急遽カイロより帰国した。

【5月18日】学生は国会で政治抗議集会を開催し、街頭の暴動・略奪への波及を抑制した。ハルモコ国会議長が大統領に辞任を要求した。

【5月19日】スハルト大統領はTV演説を行い辞任を拒否し、代わりに改革委員会を提案した。

【5月20日】有力閣僚が辞表提出が続出し、スハルト大統領の意図する改革委員会の人選が成立しなかった。

この日はインドネシアでは祝日に準じる民族覚醒記念日である。1908年5月20日オランダ植民地時代に民族主義運動の先駆者ストモは民族の自覚を促すブディ・ウトモ(→286)の第1回大会が開催されたことにちなむ由緒ある記念日である。

この日に大量動員による抗議集会が計画されていた。その政治的意図は、民族主義者の先輩が血と汗で独立を勝ち取ったのはスハルトのような男を大統領にするためではなかったはずであるというメッセージであろう。

天安門事件の再発が予想された大規模抗議集会は軍の要請により中止された。スハルト大統領を辞めさせるという裏取引があったとおもわれる。

【5月21日】スハルト大統領は退任し、ハビビ大統領が就任した。

²⁹ 1998年5月のジャカルタ暴動事件には次のような目撃談がある。中国系商店を暴徒が襲いやすいようにシャッターを壊すスパナなどの道具を配られた。放火するための油も誰かが用意した。貧民が暴動化して商店を略奪した背景には扇動した組織があった。暴動への扇動はスハルト大統領の娘婿プラボウォの関与する機関の仕業であるといわれているが、その意図は最大限に社会不安を煽りパニックになったところへ軍が出動し全ての権力を奪取してスハルト体制の挺入れを行うというものであったらしい。1989年の天安門事件の收拾方法にならおうとしたのであろう。

³⁰ スハルト大統領の辞任劇において動静が注目され、不気味な存在であったのはスハルト大統領の娘婿プラボウォである。舞台裏ではウィラント(Wiranto)国軍司令官とプラボウォ戦略予備軍司令官の間に権力闘争があったことは公然の秘密である。組織的には戦略予備軍司令官は国軍司令官の指揮下になるが、プラボウォは実力で実権を奪取しスハルト体制を護持しようとした。スハルトが辞任を発表する前夜、ハビビ副大統領の自宅に配下の軍の車が取り囲みハビビを威嚇していた。プラボウォを戦略予備軍司令官につけ、首都のジャカルタ師団司令官はプラボウォの系列の人脈を配置しておいたスハルト大統領の深慮遠謀が日の目を見た、と思われたのが5月事件の時である。いざという場合はプラボウォがウィラント国軍司令官に取って代るための布石である。5月危機にウィラント国軍司令官はすばやく手を打ち、ピンクベレーの海軍を動員し首都警備にあたらせ、学生側に海軍歓迎の声が上りプラボウォ配下の陸軍を牽制した。陸軍介入の余地をなくしてスハルト大統領に引導を引き渡した。ウィラント国軍司令官は数日後にプラボウォを左遷し、首都のプラボウォ人脈は入れ替えられた。しばらくしてプラボウォは軍から除籍され国外に身をかわした。スハルト大統領辞任に伴い最も警戒されていた軍によるクーデターや戒厳令もなく、ハビビ大統領に移行したことでインドネシアは法治国家の面目を保った。ウィラント国軍司令官はハビビ大統領の誕生劇においてプラボウォとの権力闘争を凌ぎ、ハビビ政権のキーマンとなった。

404. スハルト辞任

「長い権力は必ず腐敗する」という格言はスハルト大統領のためにあるような言葉であった。30年は十分すぎる時間であった。国王のようになれば子供扱いの並みの大臣は大統領の顔色を窺い、片言隻語に意を汲み取ることに汲々とする。まともに諫言する人はいなくなり、周りにいるのは欲ボケの家族と取り巻きだけであった。

5月に入りインドネシア各地で暴動が発生した。5月12日のトリサクティ大学事件に続く、5月13~14日のジャカルタの暴動は世界の新聞がトップ記事で伝えた。発展途上国首脳国会議に出席していた大統領は予定を繰り上げ15日にエジプトから帰国したが、大統領は強気であった。辞任説が一部の報道で伝えられたがみじんもその気配はなかった。

さしも混乱している国内の暴動は大統領の帰国で鎮まり、治安を回復しそのカリスマ性を誇示するつもりであった。そうすればスハルト以外にインドネシアを統治する者は他にいないことが明らかになる。

しかしもはや事態は引き返せないほど進んでいた。5月18日、側近といわれてきたハルモコ国会議長³¹が辞任を勧告した。スハルト大統領は19日辞任を拒否し、改革委員会の設立を提案した。内閣の評判の悪い若干の大臣の首をすげ替えるぐらいの手直しで危機を乗り切るつもりであった。

「私がやめるのは構わないが、憲法の規定に従って次期大統領になった人がまたこのような形でやめると国家の規範が成り立たないではないか。私がやめればこういう無規範を容易にする。だから、やめるわけにいかない」という開き直りである。

辞めては困る主要な経済閣僚十数名が先にスハルト大統領に辞任を告げ、大統領に辞任を勧告した。新内閣を作ろうにも名乗りをあげる者はなかった。ゴルカルまでが辞任要求決議に加えて臨時国民協議会(MPR)召集の手続きを告げた。



ブラボワ

スハルト大統領が辞任を決意した決め手は軍の動向である。辞任が避けられないとしても戒厳令という手段が残っており、国軍が全権を把握すれば意中に適う人物に禅譲し院政をひくことを意図した。その意中の候補者は娘婿のプラボウオ(→452)であろう。

当時、軍の権力を保持していたのはウィラント国軍司令官である。大統領はウィラント国軍司令官の取り込みを図ったと思われるが、ウィラントは憲政に従い副大統領のハビビを立てる³²ことを明言した。子飼いと思っていたウィラント司令官から辞任を勧告されては万事休すであった。ウィラントの条件は大統領と家族の身体上の安全を保証するというものであったといわれる。



ウィラント

5月21日、テレビで辞任を告げ「これまでに過ちやいたらない点があったとしたら許してほしい」と付け加

³¹ ハルモコは新聞記者出身でスハルト大統領に取り入り出世をした。ゴルカル総裁として1997年選挙の圧勝を導き、その功として国会議長に就任していた。スハルト大統領の腹心であっただけにハルモコが発した辞任勧告は周りを驚かせた。

³² ハビビ新大統領とウィラント司令官は夫人同士が親戚関係になる。

えた。表情はいつも通りであったが、手の震えは隠せなかった。スハルト大統領辞任は国内はもとより国外からも歓呼の声で迎えられた。後任は憲法に従い、ハビビ副大統領が第3代大統領就任の宣誓を行った。3月11日に7選されて大統領についたスハルト最後の政権は2ヶ月11日の寿命であった。